

平成28年(2016)

8月1日



夏本番



次回の広報あしやは、8月20日発行です

▷天草五橋をマイカーでドライブ



ふるさと再発見

その二百四十三 50年前の庶民生活と 婦人生活誌

芦屋歴史紀行

昭和41(1966)年、今からちょうど50年前といえ、まず日本の総人口が一億人を突破した年として記録に残る年です。また、ビートルズが来日し、グループサウンズブームが起きました。余談ながら、なぜかエレキギターが教育関係から嫌われていたそうです。特撮テレビドラマ「ウルトラQ」「ウルトラマン」がはじまったのもこの年でした。

町だったでしょうか。さかのぼること2年前の昭和39(1964)年に国民宿舎が開館しています。昭和41(1966)年には波懸け遊歩道が完成し、芦屋の海水浴場には海浜プールがお目見えしました。観光に本腰を入れていたことが伺えます。町民会館が完成したのもこの年のことでした。さて、婦人生活誌『暮らしの手帖』を、百万部を発行する国民的雑誌にまで押し上げた企画のひとつに「商品テスト」があります。昭和29(1954)年から平成19(2007)年まで続きました。石油ストーブやアイロン、ソックス、マッチ、醤油、電球などを取り上げました。最終的には250種類以上を誌上で比較調査に取り上げました。



△暮らしの手帖で高評価だったストーブ

「商品テスト」では、商品を実名で紹介したので、評価の高かったものは売上を伸ばし、逆に批判されたものは売上が鈍りました。そのため、メーカーからは「商売の邪魔をするな」と注意されることも少なくなかったようです。自分たちでその商品を実際に使ってデータを集めた「商品テスト」。テストは気が遠くなるほど根気よく、細心の注意を払って行われました。また、「商品テスト」は商品の品質向上にも役立っています。たとえば第57号に掲載された石油ストーブのテストでは、国産ストーブの性能の悪さが厳しく指摘されました。すると各メーカーは改良を重ね、日本の石油ストーブの品質は大きく飛躍し、最終的には、基準とされた海外メーカーのストーブより高い評価をうけるストーブまで現れました。

決して妥協を許さない『暮らしの手帖』の編集方針が、戦後の私たちの生活向上に大きく貢献したと言えるのではないのでしょうか。
(文・芦屋歴史の里)

編集後記

▼はまゆう自生地に撮影に行く
と昼夜問わず多くの人が訪れています。そこで行く度に出会う人物がいます。それは、芦屋町を愛してやまない85歳のカメラマン、重岡さん(山鹿)です。白いはまゆうの花と雲と波、青い海と空に観光する人や磯遊びの子どもたちを加え芦屋の魅力が撮影するのが趣味だと話され、炎天下の自生地でカメラを構える重岡さんの姿に本当に驚かされました。夕暮れ時には、雲が赤く染まり違う魅力を披露してくれる自生地。重岡さんが毎日通う気持ちがかかります。(敏守)

▼最近の外気温についていけない私。町内ソフトバレーボール大会も山笠も暑すぎませんでしたか。以前は、毎日ソフトボールをして真っ黒こげになっても、一皮向ければどうってことはありませんでしたが、今は写真を撮っているだけでバテバテ。年齢のせいにはしようと思いましたが、ソフトバレーや山笠に参加されている皆さんは、年齢を問わず、どなたも元気がいい！最近、総合体育館で人気のスロートレーニング。数か月続けて体力がついたと言う人も。私も参加させてもらおうかな。(福田)